

インターネット俳誌／SEIGETU

# 清月

8月中の出句 17名 延べ668句



第169号 平成26年 8月

## 省略が佳句を生む

ゆたか

俳句は、多くのことを詠み込むものではありません。句材のポイントを押さえて鮮明に表現し、あとは省略することによって読者の心の中の想像を広げ詩情・俳趣を味わって貰うものです。

即ち、一句の焦点を絞る事が肝要で、作者の感動が何処にあるのかを鮮明にする必要があります。

カメラでいえば、ピンぼけであってはならないので、焦点は必ずポイントに合わせていなければなりません。

ポイントに焦点が合っていて前後がボケている状態がよいとされます。カメラレンズは解放状態で明るく捉え、高速でポイントを切り取る必要があります。

初心者の場合、目にしたことは総て鮮明に詠まなければ読者に分かってもらえないのではないかと思います。レンズを絞り込み、低速で切り取ることから手振れのような、俳句と懸け離れた状況説明文書になったり、俳句として成立しなくなったりします。

俳句は、省略・言葉少なな文学である事を忘れないようにしたいものです。

目にした句材の何処をどうするかは、経験と作句を続ける事により自然に身についてきます。作句に当たっては、自身が感動したことや目を奪われた景的を絞って、それを邪魔するような要素は思いきって省略するようになりたいものです。

以上

目次

近詠	ゆたか	2
雑詠選	ゆたか	3
寸感	ゆたか	9
互選集計結果報告	事務局	10
互選一〇句の披講	幹夫	11
	よし子	
	恵山	
	睦夫	
	允孝	12
	しゆじ	
	宏一	
	省司	
	美琴	13
	伸義	
	順一	

近詠

野田ゆたか

淋しげに逢魔ヶ時の秋の蟬  
 七夕竹撓む願ぎこと増え続け  
 寝落ちたる三十六峰星飛べり  
 無縁塚一つひとつに盆の月  
 里の秋旬の餉のもの食卓に

雑詠

(太字は秀句)

ゆたか選

走り来よ苧殻は長き足なれば 千葉 清水恵山  
球児去り甲子園早や新涼に 同  
わだつみの声不知火の向ふから 同  
棚経の僧へ静かに風送る 同  
スタミナを秘めて可憐な葦の花 同  
比良仰ぐ生水の郷や稲の秋 吹田 池下よし子  
遅れ来て手もとせはしき秋扇 同  
珈琲はブラックが好き赤とんぼ 同  
焼け跡に遊びし記憶蟬しぐれ 同  
うづたかき縁の座布団盆用意 同

白粥の喉にするりと今朝の秋 岐阜 石崎そうびん  
空海の修行の岩屋浜万年青 同  
教練の真似ごとせし日草いきれ 同  
すり減りし駅の階段秋暑し 同  
手に軽き黄瀬戸の猪口や走り蕎麦 同  
文月も一筆箋にこと足りて 島根 白根鈴音  
健啖の手本となりて生身魂 同  
道中に何を祝うや水引草 同  
宍道湖に夕日沈めて星月夜 同  
浴衣着て慣れぬ乙女の裾さばき 同  
木漏日の甘きみちのく葦の花 岡山 橋本幹夫  
山車曲り小兵打つ飛ぶ大手町 同  
典子忌の白き願の糸に雨 同

一葉落つ公園口の石階に岡山橋本幹夫  
 広き海見てゐる八月十五日同  
 咲き変る化粧直して花木権大阪木村宏一  
 晩夏光街見下ろして八合目同  
 秋立つや吹く風軽き尾根を行く同  
 遠花火記憶新たに旅の中同  
 激闘の尽きしグラウンド蜻蛉舞ふ同  
 くつきりと連峰望む今朝の秋三重山口美琴  
 控へめに茗荷の花の白さかな同  
 プラレール児の世界なる夏座敷同  
 遠花火連続音で終演す同  
 土砂崩れトツプ記事なる秋出雨同  
 若者の街のファッション秋に入る三重後藤允孝

朝顔の雨に冴えたる濃紫三重後藤允孝  
 一滴の滴りやがて大河なる同  
 絵手紙の咲き盛りたる凌霄花同  
 桐一葉落ちて浄土へ還りけり同  
 丘を越え祭り音頭の流れくる千葉筒井省司  
 露草や束の間の藍輝かせ同  
 コンビニにコーヒー香る今朝の秋同  
 野を歩き手に秋草の二三本同  
 野分去る雲の切れ間の空青し同  
 噴く汗や胸板厚き甲板長千葉田村公平  
 新牛蒡掻き揚げの香を独り占め同  
 草いきれ抜けて広がる九十九里同  
 船底の鉄板匂う残暑かな同

唐黍をもぐ百姓の力こぶ 静岡 渡邊春生  
 すすき野の富士なだらかに海の入る 同  
 棚経の僧そそくさと帰りけり 同  
 あななすの水滴黄色を輝かす 愛知 石川順一  
 流れ星願ひを声に出して見る 同  
 赤のまま何時の間にやら野に来たる 同  
 立秋や季節追ひ越すけふの雨 鳥取 瀬尾睦夫  
 一駅を濡れて走るや大夕立 同  
 秋蟬のけふが別れか鳴きをさむ 同  
 それぞれに草の匂ひや草いきれ 大阪 森戸しゅじ  
 すつぽりと顔を覆ひて草むしり 同  
 片翳やおしゃべりの列一列に 愛知 駒田暉風  
 秋暑し草木は萎れ老いの身も 同

葉陰にも風に乗せられ糸蜻蛉 山梨 志村万香  
 山間になぞる大文字なりしかな 同

寸感

ゆたか

走り来よ芋殻は長き足なれば 恵山

瓜の馬の脚は一刻も早く帰宅されますように長く、茄子の牛の脚は名残を惜しみゆつくり帰還されますよう短く作られる作者。

ご先祖様を待ちわびておられる気持ちや盃蘭盆の景がよく伝わってきます。

比良仰ぐ生水の郷や稲の秋 よし子

各家庭に「かばた（湧水を炊事に用いる設備）」がある琵琶湖畔にある生水（しよず）の郷。比良山からの水の恵みを受けて良く育っている稲田の景が美しく伝わってきます。

比良（固有名詞）がよく効いている。

白粥の喉にするりと今朝の秋 そうびん

高校野球が開幕される頃。暑さは暦ばかりというも待ち望んでいた立秋。

朝食の粥の食感から、秋らしいわずばかりの涼しさを感じられた作者。

立秋の朝の景が書き切れている。

文月も一筆箋にこと足りて 鈴音

短冊に歌や願ごとを書く七夕（旧暦七月）行事から来ているという文月。

本文のみで事足る親しい人との長年の交友状況や信頼関係が見えてきます。

日頃の作者の生活の良さが伺えます。

木漏日の甘きみちのく萼の花 幹夫

古代から風邪薬や胃腸薬になる食材として各地で栽培されてきた萼。

近年では、福島などの地域で栽培されている。花茎に被片六枚の真白い可憐な花が咲く。

清閑な花の景が見えてきます。

咲き変る化粧直して花木権 宏一

放置すると幹が1m以上になり、毎日下から上へと咲き替わるという一日花。

花は午前三時頃に咲き、夜明けとともに新しい花を目にする事となります。

「化粧直して」が、よく効いている。

互選一〇句の集計結果 互選者十一人

高点句

四点 新涼や剃り跡青き修行僧

田村公平

三点 文月も一筆箋にこと足りて

白根鈴音

同 宍道湖に夕日沈みて星月夜

同

同 遅れ来て手もとせはしき秋扇

池下よし子

同 手火花や桃の印のマツチ箱

清水恵山

同 朝顔は閉ぢて雫の花となり

木村宏一

同 控へめに茗荷の花の白さかな

山口美琴

高点者

十二点 池下よし子

十一點 清水恵山

十點 木村宏一

互選一〇句 橋本幹夫選

てのひらに甘さ確かめ梨を剥く 後藤允孝  
手火花や桃の印のマツチ箱 清水恵山  
風は西いち日ごとに秋となり 森戸しゆじ  
夕空に薄絹の雲踊の輪 石崎そうびん  
空蟬や夕日に透ける琥珀玉 池下よし子  
亡き人の座る場所空け盆用意 渡邊春生  
宍道湖に夕日沈みて星月夜 白根鈴音  
八月や宿題終へて子の笑顔 山口美琴  
芙蓉咲く横に明日咲く蕾有り 筒井省司  
朝顔は閉ちて雫の花となり 木村宏一  
互選一〇句 池下よし子選  
それぞれに草の匂ひや草いきれ 森戸しゆじ  
晩夏光街見下ろして八合目 木村宏一  
白粥を喉にするりと今朝の秋 石崎そうびん  
赤のままいつのまにやら野に来たる 石川順一  
蝸の鳴き始めたる雨後の里 橋本幹夫  
球児去り甲子園早や新涼に 清水恵山  
丘を越え祭り音頭の流れくる 筒井省司  
唐黍をもぐ百姓の力こぶ 渡邊春生  
水打つて風の道あり石畳 後藤允孝  
宍道湖に夕日沈みて星月夜 白根鈴音

互選一〇句 後藤允孝選

朝顔は閉ちて雫の花となり 木村宏一  
落日やなほ鳴き止まぬ法師蟬 石崎そうびん  
木漏日の甘きみちのく葎の花 橋本幹夫  
気まぐれな雲のひと日な花木権 池下よし子  
宗祇水声やはらかに踊唄 山口美琴  
涸みても明日をまた待つ花木権 清水恵山  
坪庭の隅にほのぼの花茗荷 筒井省司  
新涼や剃り跡青き修行僧 田村公平  
秋あざみ雨に打たれて刺尖る 渡邊春生  
文月も一筆箋にこと足りて 白根鈴音  
互選一〇句 森戸しゆじ選  
秋立つや吹く風軽き尾根を行く 木村宏一  
秋暑し草木は萎れ老いの身も 駒田暉風  
典子忌の白き願の糸に雨 橋本幹夫  
葉陰にも風に乗せられ糸蜻蛉 志村万香  
比良仰ぐ生水の郷や稲の秋 池下よし子  
プラーレル児の世界なる夏座敷 山口美琴  
わだつみの声不知火の向ふから 清水恵山  
露草や束の間の藍輝かせ 筒井省司  
すすき野の富士なだらかに海の入る 渡邊春生  
文月も一筆箋にこと足りて 白根鈴音

互選一〇句 清水恵山選

咲き変る化粧直して花木権 木村宏一  
迎火や遠くに若き母の声 石崎そうびん  
流れ星願ひを声に出して見る 石川順一  
山車曲り小兵打つ飛ぶ大手町 橋本幹夫  
焼け跡に遊びし記憶蟬しぐれ 池下よし子  
醉芙蓉人目忍んで紅をさし 筒井省司  
新涼や剃り跡青き修行僧 田村公平  
若者の街のファッション秋に入る 後藤允孝  
くつきりと連峰望む今朝の秋 山口美琴  
山ほどの土産ばなしの墓参り 白根鈴音  
互選一〇句 瀬尾睦夫選  
炎天や少年肩を怒らせて そうびん  
三尺寝独り占めするベンチかな 田村公平  
緑陰に暫し休みて風を入れ 後藤允孝  
空蟬や夕日に透ける琥珀玉 池下よし子  
秋暑し二の足踏んで軒を出ず 駒田暉風  
処暑の朝こつんと跳ねるトースター 橋本幹夫  
水引の花は山野に不動たり 石川順一  
露の世に老後の一步踏み出さる 春生  
控へめに茗荷の花の白さかな 山口美琴  
自ずから丸くなりけり踊りの輪 清水恵山

互選一〇句 木村宏一選

白粥を喉にするりと今朝の秋 石崎そうびん  
山車曲り小平打つ飛ぶ大手町 橋本幹夫  
遅れ来て手もとせはしき秋扇 池下よし子  
くつきりと連峰望む今朝の秋 山口美琴  
土間裏へ残る暑さを逃しけり 清水恵山  
醉芙蓉人目忍びて紅をさし 筒井省司  
新涼や剃り跡青き修行僧 田村公平  
露の世に老後の一步踏み出せり 渡邊春生  
朝顔の雨に冴えたる濃紫 後藤允孝  
宍道湖に夕日沈みて星月夜 白根鈴音  
互選一〇句 筒井省司選  
仕事終えぐつと一氣に砂糖水 清水恵山  
秋立つや吹く風軽き尾根を行く 木村宏一  
自転車の籠が頬張る西瓜かな 橋本幹夫  
桃の香の仄かに匂ふ仏間かな 後藤允孝  
玄関の靴の散乱盆休み 池下よし子  
新涼や剃り跡青き修行僧 田村公平  
亡き人の座る場所空け盆用意 渡邊春生  
秋の夜や朗読で聴く方丈記 石崎そうびん  
控えめに茗荷の花の白さかな 山口美琴  
手火花や桃の印のマツチ箱 清水恵山

互選一〇句

山口美琴選

それぞれに草の匂ひや草いきれ 森戸しゆじ  
晩夏光街見下ろして八合目 木村宏一  
流れ星願ひを声に出して見る 石川順一  
木漏日の甘きみちのく葎の花 橋本幹夫  
葉陰にも風に乗せられ糸蜻蛉 志村万香  
遅れ来て手もとせはしき秋扇 池下よし子  
洞みても明日をまた待つ花木権 清水恵三  
露草や束の間の藍輝かせ 筒井省司  
朝顔の雨に冴えたる濃紫 後藤允孝  
文月も一筆箋にこと足りて 白根鈴音

互選一〇句

山縣伸義選

謹厳の恩師の訃報ちろる鳴く 池下よし子  
遅れ来て手もとせはしき秋扇 同  
白桃の水をはじけて浮かびけり 同  
控へめに茗荷の花の白さかな 山口美琴  
八月や宿題終へて子の笑顔 同  
青鬼灯村を巡りて橋ひとつ 春生  
赤き花咲き乱れたる暑さかな 同  
瓢の笛何の気なしに吹けと言ふ 田村公平  
遠花火ホームに独り電車待つ そうびん  
虫干しや我が青春にLP盤 瀬尾睦夫

互選一〇句

石川順一選

病葉や煩い癒す風ありぬ 木村宏一  
梅花藻を覗く水路の水速し 同  
急ぐなと山車を諫める祭髪 田村公平  
踊り場がねぐらとなりし秋の蝉 同  
手火花や桃の印のマツチ箱 清水恵山  
莢を打つ唄のリズムに小豆跳ぶ 同  
片陰に行列をなすラーメン屋 そうびん  
川あればそこに橋あり星祭 後藤允孝  
山の香のぎゆうぎゆう詰めのお中元 橋本幹夫  
底紅や箆笥に残る由緒書 池下よし子

インターネット俳句 清月  
第169号  
平成26年8月中の出句から

発行  
平成26年 9月20日

主宰 兼 編集  
野田ゆたか

発行所  
枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ  
<https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm>